

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

高陽院の姫君と申すは、鳥羽院の御女、美福門院の御腹なり。この宮の御とり子にて、その御さきをたのみ給ひけるに、はかなく隠れさせ給ひける。宮のうちの御歎きはたとへむかたなかりけり。御わざの夜、人々参り集まりたりけるに、御簾の内に、いささかも人の泣く気色聞こえざりけり。隆季大納言、いまだ殿上人の時、参られたりけるが、ことに感じ申して、「いみじきことかな」といはれけり。

物を歎くも、悦ぶも、気色にもてあまるは、けしからぬよりあるわざなり。高陽院の御さまは、あまりに男遠くて、男女ならび居たる絵かける扇をば、捨てられなど。かへりて世づかぬさまにあざけれども、深く昔びたらむかたは、いみじきためしと申すべし。

西行法師、男なりける時、かなしくしける女の、三四ばかりなりけるが、重くわづらひて、限りなりけるころ、院の北面のものども、弓射て遊びあへりけるにいざなはれて、心ならずののしりくらしけるに、郎等男の走りて、耳にものをささやきければ、心知らぬ人は、なにも思ひいれず。西住法師、いまだ男にて、源次兵衛尉とてありけるに、目を見合はせて、「このことこそすでに」とうちいひて、人にも知らせず、さりげなく、いささかの気色もかはらでゐたりし、ありがたき心なりとぞ、西住、のちに人に語りける。

これらは、さまこそかはれども、みなものに耐へ忍ぶるたぐひなり。心をもてしづめぬ人は、何ごともはなばなし、けしからぬあやしの賤の女などが、もの歎きたる声、気色は、隣里も苦しく、いかでか耐へむと聞ゆれども、一日二日などに過ぎず。のちには、さる気ありつるかどに思はぬこそ、あさましけれ。

注 高陽院……鳥羽上皇の皇后、藤原泰子。

高陽院の姫君……鳥羽上皇皇女叡子内親王。生母は美福門院得子。高陽院の養女となる。

この宮……高陽院をさす。

とり子……養子。

男なりける時……出家していなかった時。

問

この文章の内容の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選べ。

ア 悲しいことをじっと我慢している人々は、悲しみをおさえずに感情に表す人よりも、心が冷たい。

イ つらいめにあつたときに、悲しみをこらえる人々よりも、悲しい気持ちを正直に表す人々のほうが、立派である。

ウ 大げさに態度やことばで表さなくても、静かな雰囲気や短いことばからすべてを察することができるような人こそ、大切な友である。

エ 思っていることを顔に出さず、じっと我慢しているような人々は、気持ちをおさえずに態度に表してしまうような人々よりも、立派である。

オ ひどく悲しくつらいことでも、数日もたてば薄れていくものだから、いたずらに感情的にならず、気持ちを抑えて静かに暮らすべきである。

【解説】

◇本文の構成

第一段落

高陽院

養女の叡子内親王を亡くす。

←

悲しみを表に出さない。

第二段落

高陽院

男性との関わりを避ける。

↓昔のやり方を守る、素晴らしい例。

第三段落

西行法師

競射の最中に娘を亡くす。

←

悲しみを表に出さない。

第四段落

高陽院も西行法師も自分の心を鎮めて物事に耐え忍んだ例。

⇔

身分の低い賤しい女が物事に激しく歎く様子と対照的。

↓しかも数日でその感情を忘れるのであるから、驚きあきれる。

【現代語訳】

高陽院泰子さまの姫君（叡子内親王）と申し上げる方は、鳥羽院の御娘で、母君は美福門院さまである。この高陽院のご養女で、そのご将来をあてになさっていたのだが、若くしてお亡くなりになってしまった。院中のご悲嘆はたとえようもなかった。（しかし）ご葬送の夜、人々がご弔問に参上していたが、御簾の中（の部屋）では、少しも人が泣いている様子が聞こえてこなかった。隆季大納言が、まだ殿上人の（ご身分の）時、参上されていたのだが、格別に感銘を受け申し上げて、「素晴らしいことだなあ」とおっしゃった。

物事を歎く時も、喜ぶ時も、表情に出過ぎるのは、よろしくないことである。高陽院さまのご様子は、あまりにも男性との関わりを遠ざけていらつしやり、男女が並んで座っている絵が描かれた扇を、お捨てになっていたなどと（お聞きする）。かえって世間離れた様子に批判される（こともあった）が、深く昔のやり方を守っていらつしやった点では、素晴らしい例と申すべきであろう。

西行法師が、出家していなかった時、かわいがっていた娘で、三、四歳頃（の女の子）であったが、重い病気にかかり、もう死ぬ間際であった頃、院の北面の武士たちで、弓を射て競い遊ぶことがあり（西行も）誘われて、気乗りのしないで（参加し、）大騒ぎして（一日を）過ごしていたところに、家臣が走ってきて、（西行の）耳に何かをささやいたのだが、何も知らない人は、気にもとめない。西住法師が、出家していない頃のこと、源次兵衛尉と名乗っていた時のことだが、（西行は西住と）目

を見合わせて、「このことこそすでに（娘が死ぬことはすでに心得ていた）」とつぶやいて、人には何も言わず、（何事もなかったように）少しも表情を変えないことなく（その場に）いたのは、立派な心がけであると、西住は、後で人に語ったということだ。

これら（の話）は、形こそ違っても、みな物事に耐え忍んだ例である。（自分の）心を鎮め（ておけ）ない人は、何事（において）も派手で、よろしくない身分の低い賤しい女などが、何かを歎いている声や、様子は、隣村にいても見るに苦しく、（あのような苦しみに）どうして耐えられるのだろうかと耳に届くものだが、（そのような苦しみを）一日、二日に過ぎない。後になれば、そのような歎きがあったのかとさえ思わないほど平気である様子には、驚きあきれられる。

【解答】

エ

ア「心が冷たい」が×。本文には、悲しみの感情を表さなかった高陽院の例（第一段落）と西行法師の例（第三段落）とが挙げられている。それぞれ、高陽院については隆季大納言が、「いみじきことかな（素晴らしいことだなあ）」と評しており、西行法師については西住が「ありがたき心なり（立派な心がけである）」と称している。

イ「悲しい気持ちを正直に表す人々のほうが、立派である」が×。アの解説参照のこと。

ウ「静かな雰囲気や短いことからすべてを察することができるような人こそ、大切な友である」が×。西行法師がかわいがっていた娘を亡くした時の悲しみを、西住は「目を見合はせて」察したと本文に書かれてはいるものの、そうすることのできる人が「大切な友である」とは書かれていない。

オ「数日もたてば薄れていくものだから、いたずらに感情的にならず、気持ちを抑えて静かに暮らすべきである」が×。第四段落に、よろしくない身分の低い女などが物事に歎き、激しく感情を表すものの、数日もたてば薄れていくことが述べられている。そのことに対して、そのような歎きがあったのかとさえ思われないほど平気である様子には、驚きあきれられる、と続いている。

【作品（作者）解説】

建長四年（一二五二）成立。筆者は六波羅むくはら二藤左衛門とうさゑもん入道説があるも、未詳。本文の序によると、

本書はまだ学問を修めていない少年たちに、よいことを勧め、悪いことは戒め、思慮分別を身につける手がかりとして、教訓を十篇に分け、「十訓抄」と名付けたとある。多岐にわたる話が、具体的な処世訓として書き記されている。